



AI事業者ガイドライン 利活用事例

2026. 10. 30

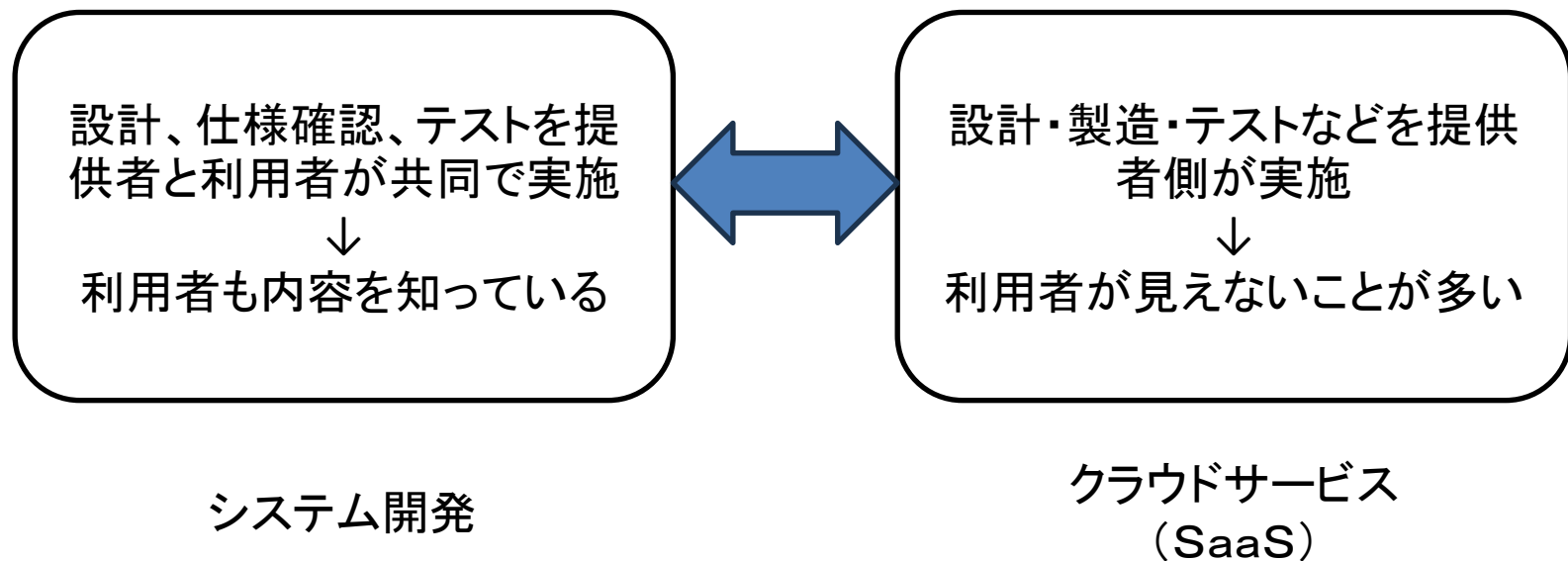
一般社団法人
日本クラウド産業協会
日高 昇治

1. AIに取り組むASPIC

- ASPICとは
 - クラウドサービス（特にSaaS）事業者の団体
 - 1999年設立
 - 総会員数：1200超（正会員：130）
 - 主な事業：
 - 安心・安全なクラウドサービスの普及促進
 - 情報開示認定制度の運用
- ASPICがAIに取り組む理由
 - AI（特にフロンティアAI）は、クラウド上で動いている
 - SaaSがAIを搭載するようになった
 - すでに1000サービスを超える – 2025年ASPIC調べ

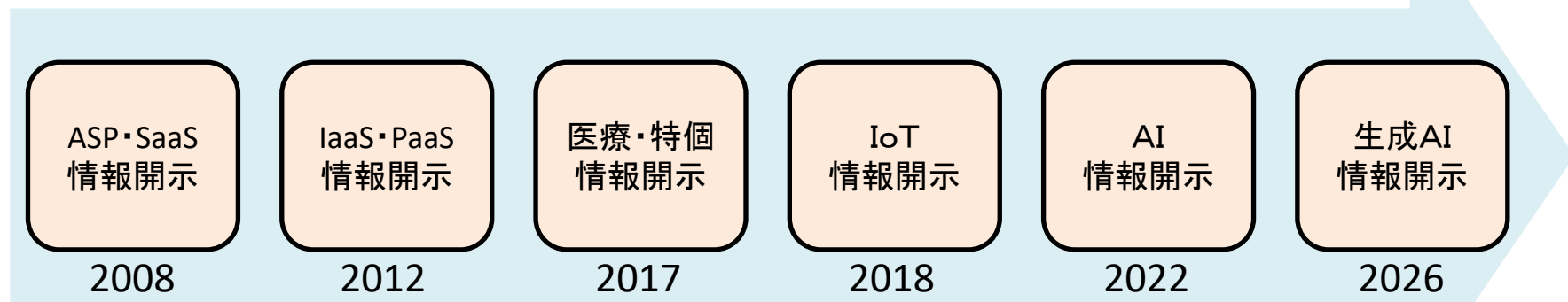
2. クラウドは「情報開示」が重要

- 情報の「非対称性」
 - システム／サービスに関する情報が提供者側に圧倒的に偏る
- システム開発との比較



3. 情報開示認定制度

- クラウドサービスの提供者が利用者に適切に情報を提供していることを認定する制度
 - 総務省：情報開示指針、ASPIC：認定制度の運用
- 18年間の歩み



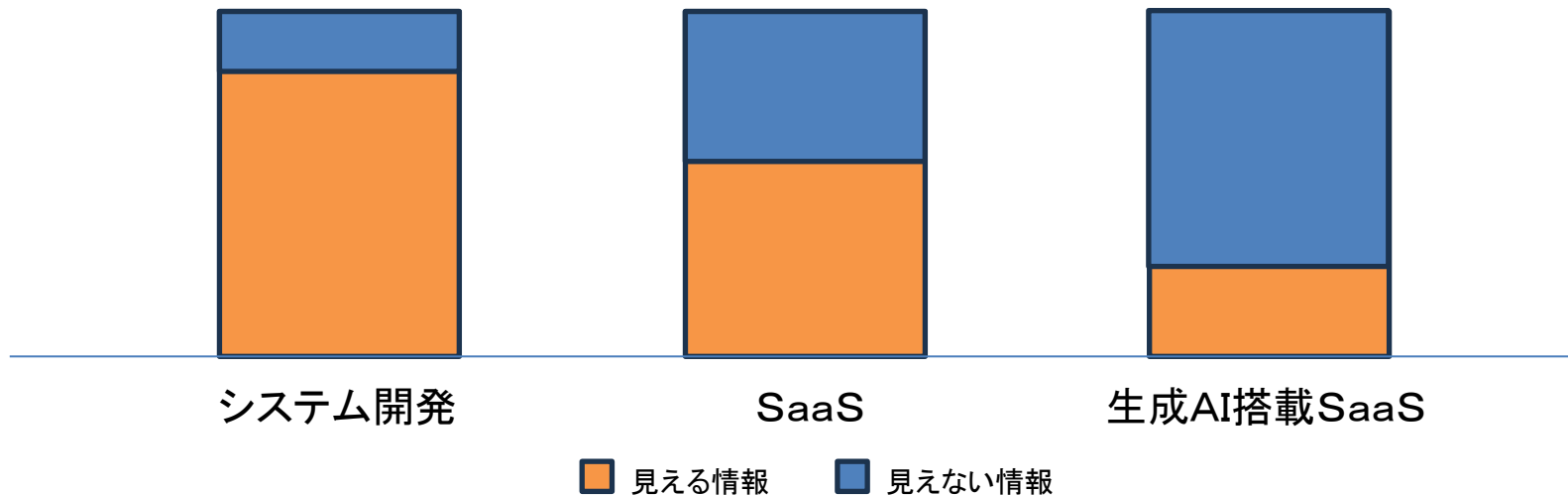
- 実績
 - 336サービスを認定
 - 利用者の44%が参考に
 - 2023年IPA調べ

4. 生成AIが「情報の非対称性」を拡大

- 生成AIで見えなくなるもの

- ・利用モデル
- ・入力データの送り先
- ・学習利用の有無
- ・AIの能力・限界
- ・リスク対策
- ・モデル変更の影響

- 見えるもの／見えないもの



5. 生成AI利用クラウドサービス情報開示認定制度



※安全なAIを「保証」する制度ではなく、

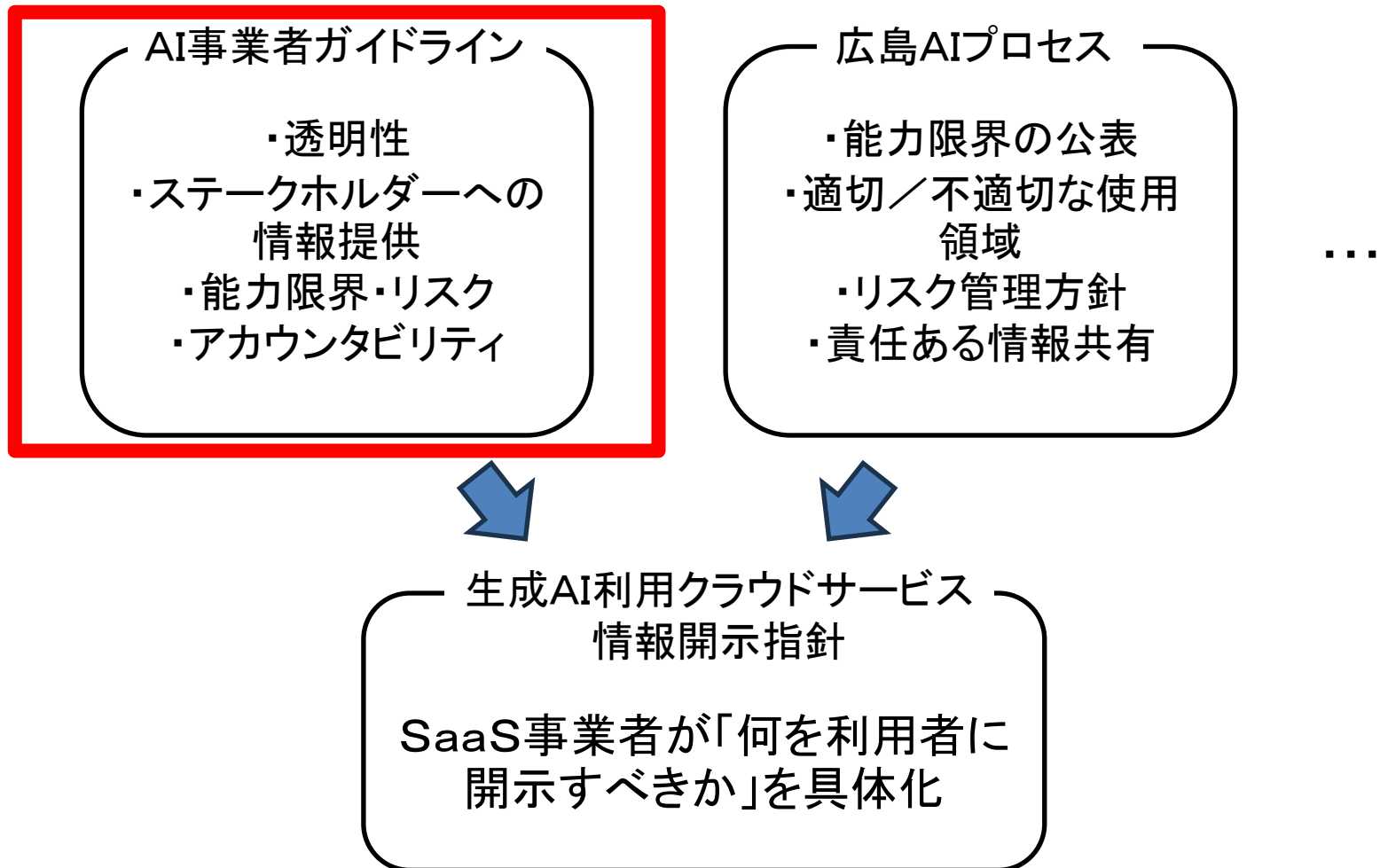
「判断に必要な情報が適切に開示されていることを確認する制度」



情報の非対称を縮小する

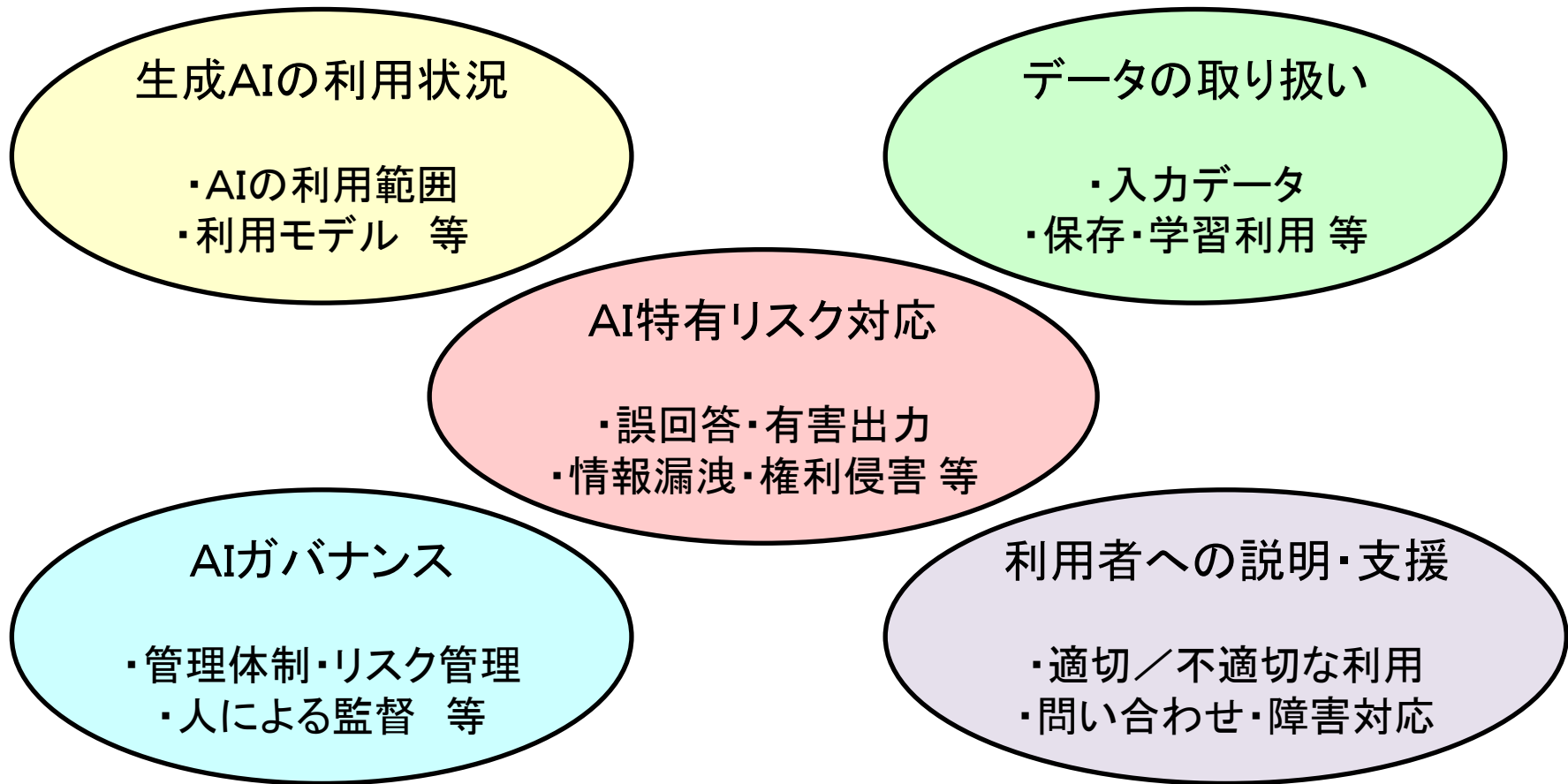
6. 制度設計プロセス

- AI事業者ガイドラインを中心とした国のAIガバナンスの方針を具体化



7. 具体的な開示項目

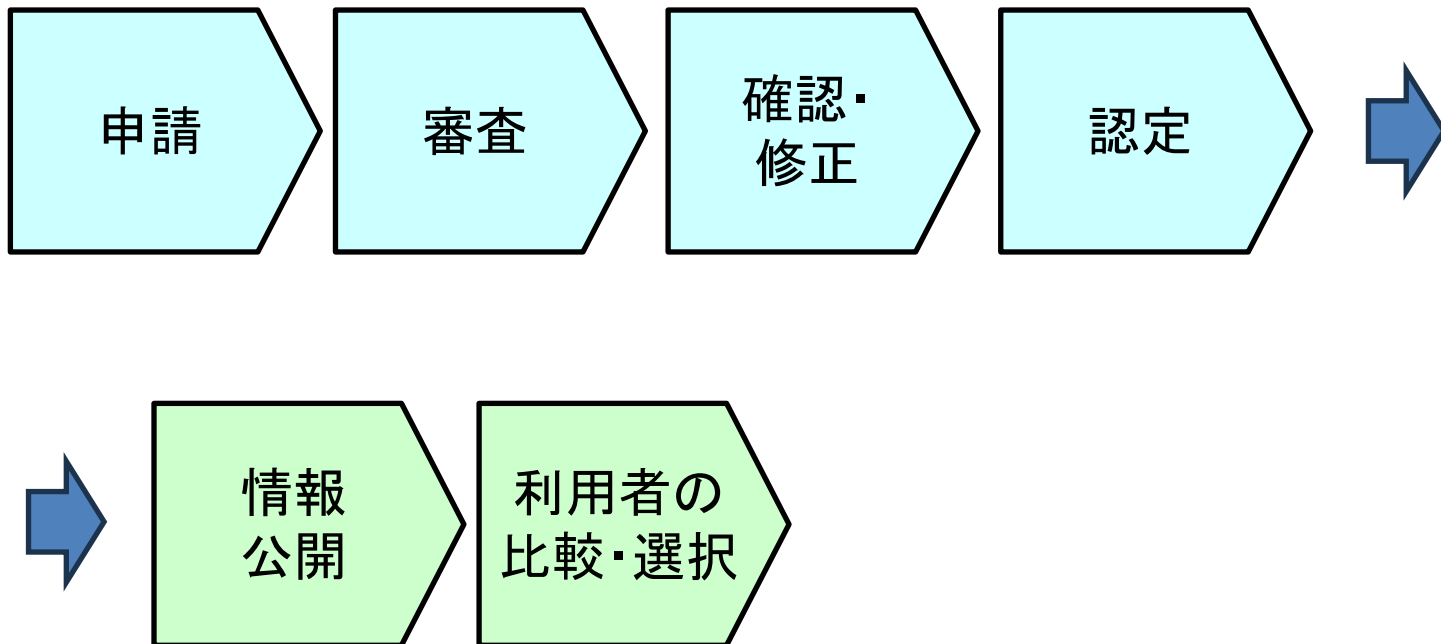
・ 利用者は何を知ることができるか



「AIを使っています」だけでなく、「どう使い、どう管理しているか」まで開示

8. 情報開示認定のプロセス

- 情報開示を第三者が確認し、利用者の選択につなげる



AIガバナンスを「行う」だけでなく、
利用者から「見える」ものにする

情報開示+第三者確認→利用者の適切な選択